一般社団法人
日本イエナプラン教育協会

ニュースレター Vol.32 2017.7月号

ワールドオリエンテーションの意義とオランダでの実践

特別顧問　リヒテルズ直子

ワールドオリエンテーションと「総合的な学習」の意味と意義

日本でも、イエナプラン教育を学んでいる人には、すっかりお馴染みのワールドオリエンテーション。でも、それは、実際どんな学びを意味しているのでしょうか？日本でも、かつて、文科省の指導のもとに推進されながら、後に学力低下の一因として批判された「総合的な学習の時間」というものがあります。ワールドオリエンテーションは、それと同じか、どこか似ているものなのでしょうか？

日本だけではなく、世界でも、「科目」の枠を超えて物事を探究する形式の学習が重要であるという議論が行われるようになって、もう久しくなります。「科目」の枠を超えるという意味では、ワールドオリエンテーションも、日本で推進された「総合的な学習の時間」も同じ性質のものだと言えますし、その展開方法として、アメリカでよく普及しているプロジェクト学習やテーマ学習といった探究的な学びもまた、同じ種類のものと言えるでしょう。

もともと「科目」に分けて教えるのは、教える側の都合という面もあり、学習内容を種類別に分ける利点もありますが、反面、物事を断片に分けて考えてしまうという習癖を生む原因ともなります。ですから、基礎学力は分けて教えた方が良い面も

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

ありますが、子どもにとって経験可能な身の回りに起きている事象や、様々な分野にわたって関係性を持っている事象を取り扱う際には、「科目」の枠を超えて総合的にアプローチした方が、物事の関係性やシステムを理解する力を養えるようになります。

ところで、イエナプラン教育の創始者であるペーターセンは、実は、「ワールドオリエンテーション」という言葉ではなく、ドイツ語でグルッペンヴェルク、すなわち、「グループ・ワーク」という表現を使っていました。複数の異年齢の子どもたちが一緒に行う探究的な学習を指していたようです。

イエナプラン教育における「ワールドオリエンテーション」は、従来の理科教育のあり方に疑問を呈し、新しい科学教育の進め方を求めていた、かつてのオランダ・イエナプラン教育協会の研究主事ケース・ボットさんが、当時、オランダにイエナプラン教育を広げるために尽力していた故スース・フロイデンタール女史や、「ライオン蟻に聞いてごらん」の論考で有名な、元プライマリー・サイエンスの研究家で実践者の故ヨス・エルストヘーストさんなどと共に体系立てていった考え方に基づいています。※注1

イエナプラン教育が広がっていった時代のオランダや西ヨーロッパの社会では、産業化や核戦争による地球環境の汚染問題が、とりわけ若い人たちの間で深刻に議論され、自らの行為が、どこかで、次の世代に渡す世界を汚染する行為に繋がるのではないか、という罪悪感を人々が強く感じていた時代でした。

ですから、単に、既存の知識を吸収するだけではなく、子どもたちが、現実に世の中で起きていることや、自然現象・社会現象に目を向け、知識や技術が持っている意義や意味を問い直しながら、今の世界だけではなく、将来自分の死後に残す世界に対しても責任を持って生きる存在になれるようにすることに、学校教育の意味を見出そうとしていたのです。セレスタン・フレネやパウロ・フレイレの教育観にも通じますね。

それが、単なる形だけの「総合的な学習」「テーマ学習」「プロジェクト学習」といった、教科枠を超える学びというだけの、無機的な呼び方ではなく、「世界に目を向ける」ことを目指した「ワールドオリエンテーション」という名称を生み出した、と言えると思います。

その点が、しばしば理科と社会科だけを折衷させたものに終わってしまう「総合的な学習」や、初めから教える側が意図している答えに向けて、いかにも、子どもたちが「発見していくか」に装わせた面白実験や、擬似的な探究学習とは大きく異なる点なのです。単に、科目と科目を組み合わせれば良いというものではなく、教える側の姿勢、子どもの学びのあり方そのものを問い直しているのです。

それは、子どもたちが、「本当に知らない」「本当に気になる」「本当に好奇心でワクワクする」ことを土台にした、子どもたちが、心の内側から抱く「問いかけ」を出発点とした学びです。教員が面白おかしく科目を超えて物事の関係をつなぎ合わせて教えるもの

※注1　ヨス・エルストヘーストの「ライオン蟻に聞いてごらん」その他の論考の翻訳は、本協会の会員用ライブラリーに収録されています。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

でもなく、子どもの思考を、結論が初めからわかった実験や議論の中で、教師の意図通りに誘導していくものでもないのです。

グループで学ぶことの意義

ただ、一歩引いて、ペーターセンの時代に使われていた「グループ・ワーク」ということの意味も、合わせてここで確認しておきたいと思います。なぜなら、２年前に発刊され（近く日本語訳が電子書籍として出る予定の）教員向け教科書「イエナプラン教育ーーー共に生きることを学ぶ学校」の中で、著者のフレーク・フェルトハウズ氏とヒュバート・ウィンタース氏は、「ワールドオリエンテーション」という言葉よりも「グループ・ワーク」を強調したいとあえて述べているからです。

私自身は、「ワールドオリエンテーション」という語にこだわりたい立場ですが、フレークやヒュバートが、「グループ・ワーク」、すなわち、「他者と共に学ぶ」ということを強調したい気持ちもとてもよくわかります。

なぜなら、近代の、産業化時代の学校は、「学び」をあまりにも個人単位の行為に押し込めてきた、という事実があるからです。戦後、特に1970年代以後のオランダでは、個人主義が極端に進み、学校教育の中で共感や協働を尊重する傾向が薄れてきたとも言え、そんな中で、本書における二人の著者は、他者がいるから学べること、他者と共に何かをなすことを学ぶべきだ、という立場を強調しています。長く「ワールドオリエンテーション」で言い慣らされてきたイエナプラン教育の探究学習を、彼らは、その意味で、あえて、「グループ・ワーク」と言い換えようとしているのです。

個人主義の浸透は、日本についても言えます。個人主義が進めば、価値観は多様化し、同時に、エゴイズムも浸透しますから、人々は、「自分はこう考える」「人がどう考えるかは自分の知ったことではない」「それもその人の自由だから」と考えがちです。

そして、そんな傾向に対して本当にそれで良いのだろうか、という疑問を呈したくなるのは、フレークやヒュバートと同様、私も同じです。

価値観の多様化は、お互いの自由を尊重する上で認め合う必要があります。しかし、もう一歩、考えを進めてみると、価値観や立場は違っていても、いえ、違っているからこそ、

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

考えを交換し合い、相手の意見に耳を傾けているうちに、対象としているテーマの持つ意義や意味についての理解が、一人で考えている時よりもずっと深まり、価値観や立場の違いを超えて、何かもっと深いところで同じ考えや見方を共有しているのではないか、と思えることがよくあるのです。何か、人類に共通する普遍的な価値意識、人間としての共感、生きることについての本質的な理解、のようなものと言えば良いでしょうか。裏を返せば、物事についての本質への理解は、お互いが、自分の意見を放り投げているだけでは決して到達できず、自分で何度も深く考えるとか、自分とは価値観や見方の異なる人と感想や意見を擦り合わせていくうちに、自分の目が開かれ徐々に到達できるものなのです。その意味で、探究的な学習は、一人でするよりも、仲間と共に、グループで学ぶ方がずっと意義深いものになります。

元来、世界は、ありとあらゆる背景を持つ異なる人々から構成されています。そこで起きる様々な出来事や現象を、どのように理解し、それを通して、世界に対してどう行動していくか、どう貢献できるかは、異なる人々そのものへの理解、異なる人々を通した自分自身についての相対的な見方を礎とした時に、最も堅固なものになるはずのものなのです。

「ワールドオリエンテーション」という語の目指すところと、「グループ・ワーク」が目指すところとが、このように一致していることがわかるのではないでしょうか。

自分と他者と世界と

それにしても、「ワールドオリエンテーション」のような学びが、これほど重要なものであるということに、すでに1970年代に気づいていたオランダのイエナプランナーたちは、たいしたものだ、と改めて思います。

なぜなら、こうした学びこそ、現在、グローバル化社会に向けた学校教育の大きな変革が求められている時代の中で、世界の先進諸国がこぞって目指し始めているものだからです。その一例として、スコットランドで2012年から実施されている「カリキュラム・フォー・エクセレンス」という学校指導要領は、３歳から１８歳までの子どもたちの学びを、科目の枠を取り外して組み立てた画期的なものですし、学力テストの結果が世界一だったフィンランドでも、これからの授業は、科目別ではなくテーマ学習を中心に進めると言い始めているからです。

私が翻訳した「学習する学校」の著者ピーター・センゲと社会心理学者のダニエル・ゴールマンが二人で著したTriple Focus—-A New Approach to Educationの中でも、著者たちは、これからの教育の目的は、科目的知識を教えることではなく、子どもたちが①自分を知り、②他者との関わり方を知り、③世界のシステムを知ること、だと言っています。

驚くことに、この３つのフォーカス点は、2000年代になって、オランダ・イエナプラン教育協会が新たにまとめたコア・クオリティの３要素と、きれいに一致しています。ヨーロッパとアメリカという二つの離れた土地で、偶然にも、同じ３つの要素が、それぞれ別に、これからの学校教育の目的として示されているのです。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

この３者について、私は私なりに、３者の間に、さらに立体的な関係性があると考えています。つまり、自分を知る（①）ためには、自分と異なる他者の存在が不可欠で、他者の言葉に耳を傾け他者を尊重する態度（②）が必要であり、①と②の関係は、どちらも相互補完的です。さらに、自分や他者の存在の意義は、生きた世界の中（③）でしか認めることができないものであり、世界が一体どのような仕組みで動いているのかを理解していなければ、自分や他者の存在意義は本当に確かめることはできないわけです。その意味で、③の世界も①の自分自身や②の他者の存在意義を理解するために不可欠な要素なのです。

このことを、もう少しわかりやすく具体例をあげながら表現してみましょう。

例えば、ある街で、人々が勝手にゴミを捨てて行き、住民の間でも問題になっている場所があったとしましょう。教室で、ある子が、「みんなが迷惑に思っているのに、どうしてあそこにゴミを捨てる人がいるのだろう」という疑問をみんなに提示したとします。そして、その疑問を元に、ゴミやゴミ捨てについての探究学習が始まりました。

色々な学び方が考えられますね。まず、教室のゴミ箱をひっくりかえし、ゴミにはどんな種類があるのかを探すことから始めてもいいでしょう。ゴミの分別、ゴミの再処理の話に学びが進んで行きます。

そのうち、どの子かが、ゴミの回収や再処理に関わっている人やプロセスを学びたいと言い出すかもしれません。そしてきっと、次には、誰に聞けば良いのだろう、と話は進むことでしょう。市役所に行ってみようか、という話までは進んだ・・・でも、「誰が行くの」「誰が電話をかけて約束するの」ということになると、誰もなかなか手を挙げないかもしれません。

もしかすると、お父さんかお母さんが市役所に勤めているから「手伝ってもらえそう」と言う子が出てくるかもしれません。または、「私が電話するわ」とあっさりいう子がいるかもしれません。

こんな時に、他の子どもたちは、「へー」って思うのではないでしょうか？「この子たちには、自分には思いもつかないことができるんだ」って、心の中で思っているでしょう。

このような経験があると、次に、何か別のテーマで学ぶ機会があった時に、自分が力を発揮できるかもしれないのです。

例えば、ある日、鳥が教室の窓ガラスに気づかず、勢いよくガラスにぶつかって地面に落ちて気を失うかもしれません。その時、子どもたちの関心は、一斉にその鳥へと向けられるはずです。子どもたちの心は好奇心に満ち満ちていて、これこそ「学びの最適期」が教室に突然やってきます。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

そんな時、日頃から鳥が大好きで、鳥のことなら何でも知っていると思っている子がいたらどうでしょう？　みんなの目は、その子に一斉に注がれるはずです。

こんな風に、子どもたちが、一人一人関心を持っていることを伸ばすようにし、機会を捉えて、どの子にも、持っている知識やスキルや、良い性格（皆を笑わせるとか、リーダーシップを取るのがうまい、一人でじっくり考えるのがうまい、など）を仲間に分け与えられるようなチャンスを見逃さずに作るようにしていれば、教室の子どもたちは、生きた現実の生活の中で、お互いが、どんな良さを持っているかを尊重し合えるようになるのです。

「イエナプランのハート」と言われる「ワールドオリエンテーション」という「グループ・ワーク」は、まさに、そういう学びを可能にし、それを、体系化しようとしているものです。

どうでしょうか、イエナプラン教育だけでなく、本来の学校教育のあるべき姿とは、こういうものなのではないでしょうか。もしそうではなく、学力を伸ばすことだけが学校の目的であったなら、子どもたちは、今のような時代、自宅で、自分一人でインターネットを使って勉強するだけでも、学力くらい簡単に伸ばせます。でも、学校は、学力だけのためにあるのではありません。学校は、そこで、子どもたちが、共に生きるということを実感し、学校をベースにしながら生きた世界と絶えず触れ合うことで、自分や他者の存在意義を見出し、お互いに、世界の中に、場と役割を持って意欲的に参加し貢献できる人間になるためにあるものなのです。

見えにくい授業

とはいえ、では、それは、具体的には授業の中で、どんな風にして進めるのか・・・それが問題です。これはなかなか一筋縄でできるものではありません。

かつて、私自身、イエナプラン教育について調べ始めた頃、「ワールドオリエンテーション」の授業がどんな風に展開されているのか、見たくて仕方がありませんでした。また、オランダに学校視察に来られる方たちも、何よりも、この「ワールドオリエンテーション」を実際に見たい、という希望を持って来られることがしばしばあります。

ところが、「ワールドオリエンテーション」の授業とは、何か、定期的に時間割に組み込まれて行われているというものでは必ずしもなく、なかなか、全体としての様子を見ることが難しいものなのです。

なぜなら、「イエナプランのハート」として、学校生活の全体に広がっている「ワールドオリエンテーション」は、普段の授業の端々に、片々として見受けられるものだからです。

例えば、ある日の朝、子どもたちがサークルになって話し合っている時に、何かのテーマが持ち上がり、「ワールドオリエンテーション」のきっかけになっているかもしれません。また、お昼休みのランチを食べながら、子どもたちがスクリーンの上で見ている短い

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

動画が、実は、今、探究している最中の「ワールドオリエンテーション」のテーマに関連づけられたものであるかもしれないのです。また、学校の近くの博物館から職員が来て「古代人の生活」についてデモンストレーションを交えながら子どもたちに何かやらせているかもしれません（例えば、火つけ石を使って火を起こしてみる、など）。これも、数日後に教室に行ってみたら、彼らが調べていた古代人の暮らしについての「ワールドオリエンテーション」の一部だとわかった、ということがあるのです。

また、午前中の自習時間であるブロックアワーを見学に行ったら、一部の子どもたちが、廊下に置いてあるコンピューターで仕事をしていたので、何か、国語か算数の練習問題をしているのかと思ってよく見てみたら、ある国の地図や通貨について調べている・・・後で聞いたら、国境をテーマにした「ワールドオリエンテーション」で、自分が担当している国についての調べ作業だった、という具合です。ブロックアワーで、机について一生懸命作文に取り組んでいるので国語の課題なのかなと思っていたら、「英雄」をテーマにした「ワールドオリエンテーション」で、ナポレオンについて調べたことを文章にしていたことだってあるのです。

絵画の時間に、ある時代の芸術家の作品を模写していたのが、オランダの黄金時代についての学びの一部だったとか、算数の対称形をギターの形を使って学んでいるのが、実は、スペインの歴史についての学びの一部だったということもあります。

つまり、教室の子どもたちが「ワールドオリエンテーション」の一環として全員で集まるのは、初めのきっかけ・仕事の分担と最後のプレゼンテーションの時だけで、実際の学びは、子どもたちがそれぞれ、自分に課された課題として、他の教科学習と合わせて、一週間の計画の中に散りばめて行なっていることがほとんどなのです。

ヤンセンの自転車と「科学する」ということ

こうした、つかみどころがなく、１時間の授業時間をはるかに超え、個々の生徒の自主的な計画をもとに進める「ワールドオリエンテーション」が、滞ることなく、確実に繰り返し実践されるために、「ヤンセンの自転車」というモデルが作られています。※注２

「ワールドオリエンテーション」は、学校が全校体制で共通のテーマを決め、各クラスの子どもたちがそのテーマのもとにクラスのサブテーマを決めて、通常、三週間とか１ヶ月程度の時間をかけて行うものと、個々の子どもたちが、自分の興味に合わせて行うもの

※注２　イエナプラン教育の教員向け教材である「イエナプラン教育のためのポイント・ガイド（p29）」を参照してください。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

とがあります。後者は、主として、夏休みなどの長い休暇に行うプロジェクトであったり、一学期程度の長い期間に、少しずつ進める探究学習だったりします。

もちろん、ある日ある朝、ある子どもが持ってきた話題が、クラスの子どもたちの大きな関心を引き、「ワールドオリエンテーション」のテーマとして使えるものであったなら、グループリーダーは、上手くそれを授業に展開すべきです。それが理想です。しかし、そうしたテーマがいつも定期的に上手く出てくるというわけでもありません。そこで、一般的には、学校が、年間に８個とか１０個程度の大テーマを決めるようにしています。

「ヤンセンの自転車」は、グループで行う「ワールドオリエンテーション」の手順を示したもので、かつてオランダのイエナプラン教師だったクリス・ヤンセンという人が考案したものです。

なぜ、自転車なのか、ですが、これは、オランダ人にとっての生活必需品とも言え、誰にとっても馴染みのあるものだからです。

自転車は、前輪、駆動するチェーン、後輪、ペダルやサドル、荷台、方向付けのハンドルなどから成りますが、そうした各部分に意味付けしながら、「ワールドオリエンテーション」の手順を示しています。特に、前輪と後輪にあたる部分は、車輪に象徴されるように、サークルを作って話し合いながら行う部分です。

【第１ステップ】

第１のステップは前輪とチェーンの部分で、サークルになって座り、学びのための「問い」を引き出すために好奇心を刺激する段階です。ある日の朝のサークルで、どの子かが持ってきた課題が、そのまま「ワールドオリエンテーション」に繋がることもあるでしょう。でも、いつもうまい具合に子どもたちがテーマを提供してくれるとは思えません。そこで、学校が、後に述べる７つの経験領域などから決めた大テーマをもとに、国が決めている「中核目標」を意識しながら、できるだけ、子どもたちが、心の内側から興味を持てるように意図して、刺激を与えます。話題になっているニュースを取り上げる、何か

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

食べ物や植物や動物や絵や物など（ホンモノ）を持って来て子どもたちに観察させ、自由に何でも問いかけさせる、子どもがハッと驚くような衣装を着たり寸劇してみせたりする、などが考えられます。

【第２ステップ】

第２のステップでは、テーマに沿って、子どもたちの問いを集めます。できれば、みんなで話し合う前に、一人一人、個別に手元の紙の上にマインドマップを作って、できるだけ問いを考えるという時間を作り、そうしておいた上で、みんながあげた問いを、クラス全体のマインドマップにまとめると良いです。マインドマップは、科目的な分野（国語・算数・歴史・地理・理科・外国語・ものづくりや絵・その他）ごとに枝分けして、そこで浮かんだ問いを分類すると良いでしょう。

【第３ステップ】

第３のステップは、計画です（まだ自転車の前輪とチェーンの部分です）。クラス全体で共有されたマインドマップをみんなが見えるところに貼り出し（またはスクリーンに映し出し）、分野ごとにこれは重要と思われる問いをいくつかずつ選び、数人ずつの小グループに分担していきます。

ここで、どの問いは是非探究すべきで、どの問いはあまり重要でないかを決めるために、子どもたちがマインドマップを作っている間に（または授業が始まる前に）、グループリーダーは、そのテーマに関して考えられる問いを自分でできるだけ想像して準備をしておき、その問いから発生する探究学習が、どんな知識やスキルにつながるかを予想して、「中核目標」（オランダ政府が示している学習指導要領）として義務付けられている課題と重ね合わせておきます。こうしておけば、新しいテーマで「ワールドオリエンテーション」をするたびに、子どもたちが提案する問いのどれが重要で、どれがあまり重要でないかが仕分けできます。また、「ワールドオリエンテーション」の学びが終わるたびに、どの中核目標の項目を達成できたかを記録でき、次のテーマを選ぶ基準となります。

もちろん、中核目標の観点から見て「あまり重要ではない」と思われる問いでも、それを提案した子にとっては気になる重要な問いであることもあるでしょう。その場合には、その子が個人で取り組む課題として、長い休みや、半年くらいの長い期間に行うプロジェクトにすれば良いのです。

【第４ステップ】

第４のステップは、いよいよ探究作業の時間です。子どもたちは、それぞれ小グループに分かれて、または、その小グループの中でさらに分担した課題について、学校での時間や家庭での時間を調整しながら、自分の担当部分について研究を進めます。自転車のペダ

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

ルを踏み、チェーンで両輪を動かしている段階と言えます。

ここで大切なのは、子どもたちに、第１次資料（情報源）と第２次資料（情報源）の違いを理解させ、可能な限り第１次資料（情報源）から情報を獲得するように努力させることです。つまり、実際にものを観察する、実験する、誰か専門家や直接テーマに関わっている人にインタビューする、といったことを優先し、本・インターネット・論文などは、他の人の解釈が入った第２次資料（情報源）であることをわきまえ、批判的に情報を取り扱えるよう注意します。こうした練習は、やがて、自分の五感を使って実際に生きたものに触れて考えることの重要性を身につけることにつながり、本でも新聞でもネット情報でも、たとえ、有名な人、肩書きのある人の言葉であっても、必ず、一度、自分で咀嚼し、本当に納得できるかどうか自分で検証する態度を身につけることにつながります。

【第５ステップ】

第５のステップは、調べたことを教室の仲間やグループリーダーと共有する「発表」の段階です。クラスの子どもたちが輪になって行います（自転車の後輪がそれを象徴しています）。発表は、紙と鉛筆を使う作文形式や、お決まりのコンピューターでのプレゼンテーションに限定することなく、できるだけ、子どもたちが自分の想像力を発揮し、学んだことを最もよく伝えられる形式を編み出すようにしましょう。それは、映画作り、展覧会、パントマイム、クイズショーなどなど、いろいろなものがあり得ます。要は、学んだことが、みんなに最もよく伝わる形式を考えることなのです。

発表は、小グループの子どもたちが協働して行います。発表での役割分担は、協働で大きなことを成し遂げる一つの経験になります。学校で毎週金曜の最終時間を使って行うミニ発表会でも、クラスごとに発表をしますが、この時間を「ワールドオリエンテーション」の発表の場にしても良いのです。

グループリーダーは、子どもたちの発表が成功するように、アドバイスし支援することに徹しましょう。決して上から見下ろすような態度や、子どもたちの努力を軽視するような言葉かけは禁物です。

発表後には、必ず、他の子どもたちからの質問や評価の時間を設けましょう。評価は、ネガティブに批判するのではなく、ポジティブに良い部分を褒め、改良できそうな点については、「ヒントだけどね」と言ってアドバイスをする形にすると良いです。こうすることで、子どもたちは、自分のグループが、全体としてより良い質の学びを進めるために、お互いが高め合う方法を学ぶことになります。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

【第６ステップ】

第６のステップは、学びの成果の記録と保管、自転車では荷台の部分です。発表の内容と共に、感想や評価も含めることで、次の学びの課題が見えてきます。成果をきちんと保管することは、生徒に、学びに対する真摯な姿勢を促します。また、後で同じテーマで学習する子どもたちのための参考（先行研究）としての意義も体験できます。

【第７ステップ】

第７のステップは、主としてグループリーダーの課題です。第１－６のステップを通して、子どもたちがどんな知識やスキルを身につけたかを振り返り、国が「中核目標」として定めていることのうち、何が実際にどこまで達成できたかを確認します。そして、まだできていない部分を意識しながら、今後の「ワールドオリエンテーション」の企画を見直します。

いかがでしょうか。お気付きの方もおいでかと思いますが、この７つのステップは、実を言うと、「科学をする」手続きに他ならないのです。つまり、

① 不思議に思い研究しようとし始める
② 何を知りたいのか問いをあげて対象物の置かれているシステムを描いてみる
③ 問いを分類・整理して研究に取り掛かる
④ 研究の成果をまとめる
⑤ 発表した成果に対して評価や批判や助言を受けることで研究の新たな課題に気づく
⑥ 同じテーマでさらに研究する後進の人々のために記録を残す
⑦ 同じテーマあるいは新たなテーマで次の研究へと進む

私たちは、これまで、学校の理科や社会科の授業で、実験の仕方は学びましたが、自分が知りたいことについて実験をするにはどうしたら良いかはあまり学んでいません。専門的な研究者が、大学や研究所で実験し調査してきた結果としての（とりあえずの）真実をテストのために丸暗記するように覚えてはきましたが、そうした研究者が、なぜそのテーマを取り上げ、どんな手続きで、何を求めて探求し、どのようにしてこの真実に行き着いたかについては、ほとんど学んでいません。

つまり、自分で真実に接近していく方法や情報が、果たして本当に真実なのかどうかを確かめる方法については、ほとんどと言って良いほど、やり方を学んでいないのです。

そんな風に、高校までの教育で学んできた末に、試験を受けて通ったら大学。でも、自分で問いを立て、自分で検証の方法を選んで研究することが課題であるはずの大学に、問いを立てたり検証方法を選んだり考案したりするスキルは、ほとんど獲得しないまま、入ってきているのです。変だと思いませんか？

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

「中核目標」を意識して

ところで、オランダでは、1981年に「初等教育法」が新たに制定された時、イエナプラン教育の影響で、「ワールドオリエンテーション」が、「中核目標」に加えられました。また、学年ごとに目標を定めるのではなく、初等教育８年間の最終段階で達成されることが望ましいとされることを「中核目標」として定めたのも、イエナプラン教育やモンテッソーリ教育などの影響です。

この「中核目標」は、国語や算数などの基礎学力は別として、他の分野に関しては、何か、知識の束をまとめて、これを学び取らなければならない、としたものではなく、どちらかというと、スキルの束として示されたものです。

参考のために、オランダの「中核目標」の「ワールドオリエンテーション」に相当する部分を翻訳して示しておきます。「中核目標」では、「ワールドオリエンテーション」は、正確には、「自分自身と世界へのオリエンテーション」となっています。第３４項から第５３項までがそれにあたり、＜人々と社会＞＜自然と技術＞＜空間＞＜時間＞の４分野に分かれています。

中核目標：自分自身と世界へのオリエンテーション（カッコ内は筆者の注意書き）

＜人々と社会＞

第３４項：　生徒は、自分自身と他者の身体的・精神的な健康に留意することを学ぶ

第３５項：　生徒は、交通への参加者及び消費者として、自分で社会行動できるようになることを学ぶ

第３６項：　生徒は、オランダ及びヨーロッパの統治制度の概略と、市民の役割について学ぶ（シチズンシップの項目）

第３７項：　生徒は、一般に認められた道徳や規範に対して尊重の念を持って行動することを学ぶ

第３８項：　生徒は、オランダ多文化社会の中で重要な役割を果たしている宗教や精神性の流れについての概略を学び、この共同社会の中で、セクシュアリティや、性的多様性を含む社会の多様性に対して、尊重の念を持って関わることを学ぶ

第３９項：　生徒は、環境に対して注意深く関わることを学ぶ

＜自然と技術＞

第４０項：　生徒は、自分たちの周囲にたくさんある動植物を分類し、かつ、名前を言え、それらの動植物がそれぞれの生育環境でどのように機能しているかを学ぶ

第４１項：　生徒は、動植物および人間の構造について、また、それらの部分の形や機能について学ぶ

第４２項：　生徒は、諸々の物質や、光、音、電気、力、磁力、温度などの自然現象について探究することを学ぶ

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

第４３項：　生徒は、温度・降水量・風などを使って、天候や気候について記述する方法を学ぶ

第４４項：　生徒は、自分の周囲にある生産物について、その働き・形状・原料の使用の間を関係づけることを学ぶ

第４５項：　生徒は、技術的問題の解決を考案し、それを実施し、評価することを学ぶ

第４６項：　生徒は、太陽との関係における地球の位置が、季節や昼と夜を生み出していることを学ぶ

＜空間＞

第４７項：　生徒は、自分自身の周囲における物事の空間的な配置を、国内外の他の場所のそれと、地形・住居・仕事・行政制度・交通・レクリエーション・繁栄・文化・倫理観などの観点から比較することを学ぶ。その場合、何れにしても、欧州連合の参加国２カ国、2004年に参加した２カ国、アメリカ合衆国、アジア、アフリカ、南アメリカの中から１カ国を選び、研究対象とすること。

第４８項：　生徒は、水害の危険にある地域に住むことを可能にするためにオランダでどのような施策が取られたかについて学ぶ

第４９項：　生徒は世界における人口集中と宗教の広がりについて、気候とエネルギー源について、また、火山・砂漠・熱帯雨林・鉱山・河川などの自然の地形について学ぶ

第５０項：　生徒は、地図の使い方、オランダ・ヨーロッパ及びその他の世界の基本的な地理を学び、現代に即した地理的な世界観を形成することを学ぶ

＜時間＞

第５１項：　生徒は、簡単な歴史資料を使い、時代や時代の区分けを明確にできることを学ぶ

第５２項：　生徒は、次の時代ごとの特徴的な側面について学ぶ：狩猟者と農民、ギリシャ人とローマ人、僧侶と騎士、都市と国家、発見者と改革者、摂政と王族、かつらと革命、市民と機関車、世界大戦とホロコースト、テレビとコンピューター。オランダの公式歴史概要にある各出来事を、時代を象徴する出発点として使うことができる。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

第５３項：　生徒は、オランダの歴史における重要な歴史的人物や出来事について学び、それらを、例示的に世界史と関係づけることができるようになる。

ケース・ボットの７つの経験領域

７つの領域	内容例
作ること・使うこと	労働、消費、持続可能性
技術	建設、機械と道具、大きなシステム、原料とエネルギー、技術をどう使う
コミュニケーション	他の人と、自然と、自然の中で、他の国の人と
環境と地形	人の生息、動植物の生息、住まいとしての地球、宇宙環境
ともに生きる	社会に帰属する、共に生きるために、共に一つの世界を
めぐる１年	一年の中の月日、お祝いや催し、学校の一年
私の人生	私、人々、大人たち、

さて、「ワールドオリエンテーション」は、前項で紹介した「中核目標」を達成するために、手段として取り組むいくつかのテーマを必要とします。つまり、テーマそのものが目的なのではなく、そのテーマを使って探究することで、「中核目標」に挙げられている様々な課題やスキルを達成できるようになることが目的なのです。学びを「探究的」なものにするには、子どもたちが、できるだけ自分が疑問に思うことから始めたり、刺激を受けた時に、身近で親近感が持てるものから始める方がやりやすいというのも、言うまでもないことです。

つまり、教科書にこれだけのことが書かれており、それを吸収させなければならないからやるという教え方ではなく、子どもの身の回りの出来事をきっかけにして、より深い学びへと繋いでいくのが「ワールドオリエンテーション」なのです。

そのために、かつてオランダ・イエナプラン教育協会の研究主事をしていたケース・ボットさんは、子どもたちを世界に導いていくための鍵となる７つの経験領域を示しました。そして、この領域をもとに、国立カリキュラム研究所で、他の教員や研究者と共に、様々な具体的な学びのテーマを考案し、「ワールドオリエンテーション」の指導法の基礎を作っています。この指導要領は、イエナプラン教育だけではなく、多くの小学校で重要な参考文献になっています。

その７つの経験領域とは、上の表にあげたようなものです。

日本でも少し工夫してみたらできることはあるのでは

日本では、総合的な学習については、一度、学力低下を招いたと総括された経験があるために、あまり積極的には勧められていないようです。しかし、反面、これからの時代に子どもたちが身につけるべき力は、単に、知識として覚えられる情報だけではなく、情報

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

そのものの選択の仕方、集め方、使い方、それを使って考え生かす力、何かを生み出したり、他者と共有する力、などであることは、日々、誰の目にも明らかになってきており、そのために、積極的に総合的な学習を見直し、実践しようとしておられる教員の方たちも多くいらっしゃることと思います。

イエナプラン教育の「ワールドオリエンテーション」の考え方は、その意味で、イエナプラン教育を超え、多くの教育者に共有してもらいたい考え方です。

日本には、「中核目標」のようなものはないかもしれませんが、日本の「学習指導要領」も、目指すところは、子どもたちがオールラウンドの力を身につけることにあると思います。そうであれば、できるだけ多くの時間を使って、あるいは、教科学習の中にテーマを統合させながら、「ワールドオリエンテーション」の実践を少しずつ広げていくことは可能です。

ケース・ボット氏の「７つの経験領域」をもとに、教員同士で、思いつくかぎりの具体的なテーマをあげていき、それらのテーマからどんな学びを発展させることができるか、日本という自然および文化的な環境の中で、独自のテーマを協働で考案していってみてはどうでしょうか。

そのような現場実践の成果が、国の制度や、学習指導要領のあり方に影響を与える力になると思います。現場で、好奇心と学びの意欲に燃えている子どもたちと関わっておられる先生方にこそ、ぜひ、お互いの知恵を交換しあって、日本なりの「ワールドオリエンテーション」の体系化のために協働し、学びあいながら成長するグループリーダーになっていってほしいと心から願っています。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

協会の会員でもあり、オランダに留学して１年になる山地芽衣さん。山地さんは日本での教員経験を経て、現在オランダの教員養成、イエナプラン教育を学んで現地から様々な情報をフェイスブックなどで発信されています。今回はそんな山地さんが肌で感じている「オランダの生活」について語っていただきました。どうぞお楽しみください！

「オランダに暮らして感じること」

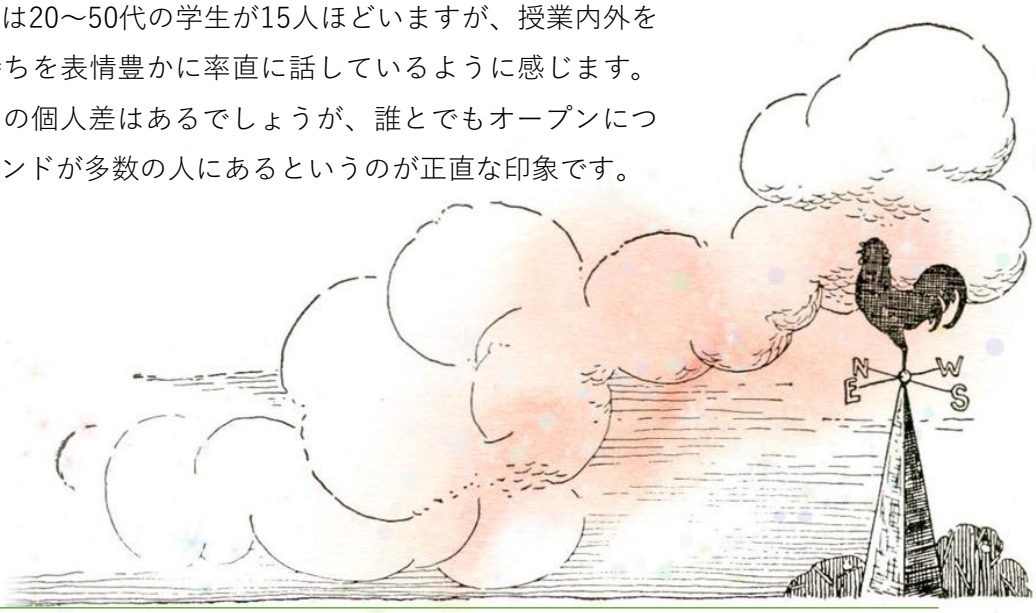
協会会員：山地芽衣

オランダの暮らし、と聞いて何が思い浮かびますか？

オランダといえば、チューリップ、風車、もちろんイエナプラン！そんなイメージの、日本から遠く離れた国の暮らしは実際にはどのようなものなのでしょう。オランダに暮らし始めて１年の私が、感じたままにオランダ・ライフをご紹介します。

私はアッセンという北の街でオランダ人たちと同居しながら、教員養成学校と、実習先のイエナプランの小学校に通いました。嬉しいことにオランダ人の彼と出会い、彼の家族とたびたび一緒に週末を過ごしています。常にオランダの人たちに囲まれながらの１年目でした。

オランダの人たちといえば、誰とでも、とにかくどこでもよくしゃべる！電車で、バスで、スーパーのレジで、知らない人とでも。年配の人たちがよく話しかけるようですが、若い世代の人も一緒に楽しそうにジョークを交えて話します。私も電車やバスで年配の人にたびたび話しかけられて、住んでいる街のすてきなところや、私の持っていた花が「きれいだね」などと気さくに話すことがありました。近所ではすれちがうときに、「やぁ」「おはよう」と笑顔で挨拶をします。ウィンクをしてくれるおじいさんもいました。教員養成学校のクラスには20～50代の学生が15人ほどいますが、授業内外を問わず、意見や気持ちを表情豊かに率直に話しているように感じます。もちろん話しやすさの個人差はあるでしょうが、誰とでもオープンにつながろうとするマインドが多数の人にあるというのが正直な印象です。



Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

オープンな彼らにとっての生活必需品は、間違いなく、コーヒーと紅茶。実習先の小学校の先生たちは、コーヒーや紅茶を片手にテーブルに集まることから一日を始めます。カップを手にしたまま、登校して来る子どもたちを教室の入り口で迎えます。休み時間や昼食時、放課後だけでなく、授業中もときどきゴクゴク。教員養成学校でも同じく。私の彼のIT関係の職場でも、然り。「コーヒーや紅茶がなかったらどうなる？」と主婦の学生に聞くと、「リラックスできない。」と返ってきました。自分を心地よい状態にして、やりたいことや、やらねばならないことに精を注ぐ。それが彼らの働き方なのだろうな、と感じています。

中には、コーヒーが嫌い…と教員養成学校のとある先生のような人もいます…が、誰にでも当てはまるであろうことは、まさに、お祭り好きなことです。国王の誕生日には、国王と親族のパレードがどこかの街で開かれます。今年は彼の職場の街での開催ということもあり行ってみると、オランダカラーのオレンジを身にまとった老若男女で街は溢れていました。彼の職場にも、同僚や同僚の恋人、家族が三世代など、幅広い年齢層で集いとても賑やかでした。国王たちが歩くルートには、ピアノ５０台の演奏、体操のショー、巨大ピタゴラスイッチなど、普段街中では目にするはずのない光景が。私の住む街には毎年恒例のモーターバイクの世界大会があります。数日前から街の中心あたり一帯に、バイクのショーやライブ会場、移動式アスレチック、遊園地が堂々と姿を現すのです。クラブ同然の音楽に思うがまま踊る全世代の人たちの姿も数多く目にしました。面白いと思える方法で非日常のときをたくさんの人と一緒に楽しんじゃう。受け止め切れないほどの大きな一体感を、他の街のお祭りでも全身で感じました。

オランダ・ライフとは、リズミカルな、【対話・仕事・遊び・催し】のサイクルといった、イエナプランでも大事にしていることそのもの。そう言っても過言ではないように思います。これは一人ひとりが自分の幸せを自分で築き出そうと生きてきた結果なのだろうと、このサイクルの中で暮らしてきて感じています。イエナプランを学びにオランダへやって来ましたが、幸せに生きること、そのために学ぶこと、これらの意味を感じ直す。そんな機会をいたるところで私に投げかけるのが、私の感じるオランダ・ライフです。

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

支部報告

今年度は、【長野（松本・安曇野）支部】が新しく立ち上がりました。

全国で少しずつイエナプラン教育を真摯に学んでいこうという輪が広がってきています。

各支部からの活動告知は日本イエナプラン教育協会のHPやフェイスブックページで見ることができます。各支部の勉強会にぜひお気軽にご参加ください！

【埼玉支部】

イエナプラン教育「20の原則」と「20の原則改題」を対話しながら読んでいます。原則のテーマが変わるタイミングで、実践報告から学び合うこともしています。どなたでもお気軽にご参加ください！

《活動日》9時半～12時、ピアザふじみにて活動

・4月２日（日）：第３回勉強会「原則３を読む」

・4月30日（日）：第４回勉強会「原則４を読む」

・5月21日（日）：第５回勉強会「原則５を読み、実践から学ぶ」

・6月18日（日）：第６回勉強会「原則６を読む」

【千葉（浦安）支部】

リヒテルズ直子さんのご帰国に合わせ、様々な対談・講演会を企画。また、勉強会も実施しております。お近くにお住いの皆様、ぜひイエナカフェにご参加ください！

《活動日》

・6月15日（木）：イエナプランDVD上映会
　　徹底対談「リヒテルズ直子×井出英作～これからの民主主義について」

・7月８日（土）：振り返りカフェ
　　徹底対談「リヒテルズ直子×井出英作～これからの民主主義について」

・7月14日（金）：イエナカフェ@浦安
　　「川崎さんの話を聴く会」

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

【東京（江東）支部】

支部代表の川崎知子さんが9月からオランダに行かれます。オランダからのご報告もお楽しみに！

《活動日》

・3月12日（日）：イエナカフェ＠江東～伊豆大島からの学び合う職員室報告～

・6月３日（土）：イエナカフェ＠二階の食堂Kanegafuchi

【東京（世田谷）支部】

13時～16時、下北沢事務所にて活動。

「20の原則」、DVDを観て対話する、ということを終え、現在は「新学習指導要領を読む」というテーマで開催しています。

・4月16日（日）：「20の原則」（DVDより学ぶ）

・5月14日（日）：新学習指導要領を読む

・6月４日（日）：新学習指導要領を読む

・7月２日（日）：実践（給食のあり方など）について考える

【長野（松本・安曇野）支部】

オランダ・イエナプラン教育の考え方を基礎にした学校づくりのための勉強会です。

《活動日》

・6月10日（土）：支部立ち上げの会「公立学校イエナプラン化準備勉強会」

・7月30日（日）開催予定：第２回イエナプラン教育勉強会「なぜイエナプラン教育？」

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

【長野（南信）支部】

イエナカフェ＠伊那谷（14時～16時）

２ヶ月に一度のペースで、DVD鑑賞と「20の原則」を読み、

みなさんが感じたこと、話したいことをざっくばらんにお話ししています。

初めての方も大歓迎です。ぜひお気軽にご参加下さい。

《活動日》

・3月18日（土）：Vol.8 伊那市

・3月22日（水）：駒ヶ根市（DVD鑑賞会）

・5月27日（土）：Vol.9 伊那市

・7月15日（土）：Vol.10 駒ヶ根市

【名古屋支部】

イエナカフェ＠ナゴヤ（13時半または14時から活動をしています。）

２ヶ月に一度のペースで、DVD鑑賞会と「20の原則」を読む会を開催しています。

《活動日》

・2月25日（土）：名古屋市（DVD鑑賞会）

・4月29日（土）：名古屋（原則１を読む会）

・6月24日（土）：名古屋（原則２を読む会）

【関西支部】

関西支部と協会本部で全国大会の企画準備を進めています。

「実践発表・質疑応答・リフレクション」を通して、 教科を横断する「探究的な学び」

についてじっくり考えていきます。

オランダのワールドオリエンテーションについてもご紹介いたします！

《活動日》

・7月29日（土）開催予定：『日本イエナプラン教育【第２回全国大会】』

～異年齢の学びとワールドオリエンテーションの視点から～

Copyright©2017 一般社団法人日本イエナプラン教育協会 All rights reserved.

【福岡支部】

月1回のペースで開催。（夕方18時頃から活動することが多いです。）

毎回新しい方が顔を出して下さる勉強会です。イエナプラン教育に関心を持つ方の幅の広さを思います。10人未満の小さな学習会ですが、「20の原則」をみんなで 、それぞれの方の多様なバックグランドが際立ち混じり合っていく、それがすごくおもしろいです。福岡近郊の皆様、どうぞお気軽においで下さい。

《活動日》

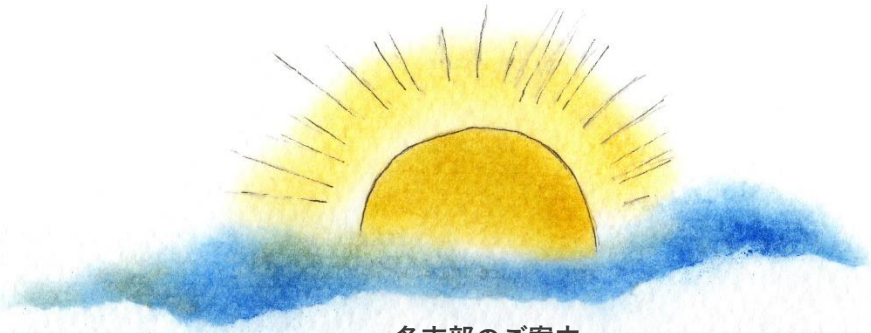
・3月29日（水）：「原則７を読む」

・4月15日（土）：「原則８・９を読む」

・5月20日（土）：「原則10・11を読む」

・6月24日（土）：「原則12を読む」

・7月25日（火）：「原則13・14を読む」



各支部のご案内

・北海道（帯広）支部　hokkaido-obh@japanjenaplan.org
・埼玉　支部　saitama@japanjenaplan.org
・千葉（浦安）支部　chiba@japanjenaplan.org
・東京（江東）支部　chiba@japanjenaplan.org
・東京（大田）支部　chiba@japanjenaplan.org
・東京（世田谷）支部　info@japanjenaplan.org
・長野（松本・安曇野）支部　matsumoto@japanjenaplan.org
・長野（南信）支部　nagano@japanjenaplan.org
・愛知（名古屋）支部　nagoya@japanjenaplan.org
・関西（大阪）支部　kansai@japanjenaplan.org
・福岡　支部　fukuoka@japanjenaplan.org

千葉（浦安）支部、東京（江東）支部、東京（大田）支部は共同運営しています。

発行元：一般社団法人日本イエナプラン教育協会　住所：〒155-0033 東京都世田谷区代田6-12-33 Sビル1階　FAX：03-3466-3439
編　集：一般社団法人日本イエナプラン教育協会　HP：http://www.japanjenaplan.org/　mail：info@japanjenaplan.org　デザイン：西垣七奈美